

詩の授業

Q & A



教材としての特長、授業で目ざしたいことなど、詩の指導にまつわる悩みに、宗我部義則先生がお答えします。

Q1 詩には、教材としてどのような特長があるのでしょうか。

A1 語感を磨き、認識のしかた・ものの捉え方を広げることに適しています。

短くて読みやすい。それでいて、豊かなイメージが浮かんでくる。これが、教材としての詩のよさだと私は考えます。

詩は、選び抜かれた豊かな言葉によって構成されています。言葉が少ない分、意味を捉えようとすると難しい。しかし、イメージを膨らませながら触れるうちに、いつしか言葉が体の中に入っていくように語感を磨くことができるのです。

さらに、詩は小説に比べて、作者が心を動かされた「瞬間」がよりストレートに伝わってくるから、それを追体験しやすい。そのため、自らの認識のしかた・ものの捉

え方を広げることに大いに資する教材になりうるものだと思います。

Q2 詩の授業で目ざすのは、どんなことでしょうか。

A2 目ざしたいのは、言葉の豊かさを知り、よりよい表現を追究する「言葉の使い手」を育てることです。

中学校の国語としては、まず技法を教えねばと考えがちです。ただ、私は、「〇〇法」という知識より、その技法によって生まれる効果について考えることを大事にしています。

「こういう表現技法だ」と教えることから入ると、「詩とは分析・解釈するもの」という印象を生徒に抱かせてしまいます。重要なのは、「何を感じるか」と「なぜそ

う感じるか」という自らの感覚をもとに表現の効果を捉えたり、鑑賞したりすること。

ですから、生徒には、まずは先入観なしに詩と出会わせたいと考えます。

例えば、「竹」(一年／萩原朔太郎。一行目から読み進めるうちに、「この独特の響きやリズムはどこから来るんだろう」と、心が感じます。その理由を考える中で、連用中止や反復の効果を感覚的に理解していくことができる。こうした経験を通して、言葉のおもしろさや豊かさを知ることができる。とよいのではないのでしょうか。

解釈のしかたを覚えるのではなく、言葉が担うイメージをさまざまに捉え、味わう。そうすることで、「伝達」のためだけではない、言葉の「詩的」な機能に気づき、ひいては、よりよい表現を追究しようとする「言葉の使い手」を育てたい。私は、そんな思いをもっています。

Q3 授業では、どういうことに気をつければよいでしょうか。

A3 一人一人の生徒の感性に働きかけるような授業を心がけたいものです。

中学生が、日常生活で詩に触れる機会は多くありません。ですから、国語の授業が、その入り口になればと思います。心を揺さぶられ、一生忘れられなくなる、そんな詩に一つでも出会えるように、授業では、解釈よりも鑑賞を大切にして、生徒の感性に働きかけるようにしたいものです。

私がよく行うのは、「この詩は、ひと言でいうと□な詩だ」という型を与え、□に入る言葉とそれに続く理由や根拠の文章を考えることから始める、鑑賞文の実践です。□の部分、その詩の第一印象を表します。苦手意識のある子でも一つは思いつきますし、いくつか書き出した中から選ばせてもいい。詩の言葉を引用しながら説明させれば、自然とその詩を味わい、鑑賞することへと導けます。

一人では気づかなくても、みんなで読むと見えてくるものもあります。私は、群読の際は、どの部分をどう読むかという台本

を考えると、生徒に任せるようにしています。群読の工夫を通して、みんなの「読み」をつくっていくのです。

「朝のリレー」(谷川俊太郎)を扱ったときには、「ここは、バトンを渡すようにテンポよく読みたい」「場所の違いを表すために、立つ場所を変えて読もう」など、生徒からは多くのアイデアが出されました。それらを実際に試したり、話し合ったりしながら、各グループの群読に仕上げていきます。詩には、一人で向き合い、読み浸るという味わい方がありますが、他者の感じ方を知ること、自分の鑑賞が広がり、確かなものになることも大いにあるのだと思います。

最近、行ったのは、谷川俊太郎さんの作品をひたすら読み味わう授業です。一人の詩人の世界に浸り、その認識のしかたと一対一で向き合う。それは、作者が「何をどう見ているのか」に目を向け、感じ取ることを意味します。いちばん気に入った詩を理由とともに紹介し合ったり、それに応える形で詩を書いたりすることを通し、生徒は、自分や友達の認識のしかたともまた、向き合うことになりました。

Q4 教材研究では、どんなことを意識するとよいでしょうか。

A4 言語活動を踏まえたうえで、詩全体を捉えるために着目すべき言葉を見つけることが大切です。

「この言葉を巡って考えることで、詩全体を捉えることができる」という、鍵となるような言葉を見つけること。教材研究は、これに尽きると 생각합니다。そのためには、教師自身がその詩を本気で味わっていないわけにはなりません。そして、それが、授業で位置づける言語活動に沿ったものであることも重要です。

例えば、朗読を行うとしたら、「どの言葉に着目して表現させれば、その詩の世界を味わうことができるのか」と考えるのです。「春に」(三年／谷川俊太郎)であれば、「この気もちはなんだろう」の反復をどう読むか」と問いかけることで、生徒はこの詩全体をつかむことができます。教材研究をするときには、そうした問いかけを見いだすことを大切にしています。